
あいさつ**会長あいさつ**

A greeting from President of Okayama Association for Laboratory Animal Science

国枝 哲夫
Tetsuo Kunieda岡山大学大学院環境生命科学研究科
Graduate School of Natural Science and Technology, Okayama University

岡山実験動物研究会が 1982 年に設立されてから今年で 35 年になります。設立当初より岡山大学、川崎医大、ノートルダム清心女子大、林原生物科学研究所、重井医学研究所などの方々が中心となって本研究会は運営され、岡山およびその周辺において実験動物、動物実験に関わる多くの研究者や技術者が参加してきました。その結果、現在に至るまで計 72 回の例会が開催され、会報は 32 号が発刊されるに至り、全国に 11 団体存在する地区実験動物研究会の中でも長い歴史を持つ研究会となっています。また、近年では、2015 年の日本実験動物学会との共催による第 4 回実験動物科学シンポジウムや、2014 年の岡山大学の頭脳循環プログラムとの共催による国際シンポジウムなど、実験動物や生命科学に関連する団体等との共同による企画も開催しています。35 周年を迎えるにあたって、まずこのような岡山実験動物研究会のすばらしい歴史を研究会会員の皆様とともに再度確認したいと思います。

一方で、この 35 年の間に実験動物を巡る状況は大きく変化していることも事実です。例えば実験動物、動物実験に対する社会の目は、この 35 年間で大きく変化し、単に「科学の発展のため」という抽象的な目的だけでは動物の犠牲を伴う研究が認められる様なことは無くなっています。私たち実験動物に関わる研究者は動物実験を行うことに対する厳格な説明責任が求められ、それに伴い文部科学省等の各省庁からの規制も一段と厳しくなりつつあります。また、実験動物に関わる技術もこの 35 年間で大きく変化、発展してきました。Brinster らのグループが、マウ

スに外来の成長ホルモン遺伝子を導入することでいわゆる「スーパーマウス」と呼ばれるトランスジェニックマウスを作製して世界を驚かせたのは、岡山実験動物研究会が設立されたのと同じ 1982 年です。その後、ES 細胞を用いたノックアウトマウスが広く生命科学に利用されるようになり、近年ではゲノム編集技術を用いることで従来に比べて飛躍的に簡単にしかも各種の動物で遺伝子の改変が可能となり、現在では、生命科学諸分野の研究で組み換え動物は不可欠な研究材料となっています。このような実験動物を巡る社会的要請の変化や、技術的な進展については、岡山実験動物研究会でも例会での特別講演や会報で広く会員の間で情報を共有できる様に努めてきました。

このような実験動物学を巡る環境の様々な変化の中で、研究会の活動についても、これまでの活動を継承、発展させていくとともに、時代の変化に応じて変わるべきところは変わっていくことも必要と考えています。実験動物学は、実験動物に関連した技術を開発し利用する研究者、技術者や、実験動物を自らの研究に利用して、科学の発展と人類の幸福に資する研究者、さらには様々な社会の要請に対応して適正な動物実験が行われる様な体制の整備に関わる方々の協力によって成り立っている総合的な学術体系です。35 周年を機会に、岡山実験動物研究会の活動が実験動物学の発展に寄与するために今後どのような方向を目指していくかについて、真剣に検討していくことが必要となっているのではないかと考えています。